

絵図の理解を目的とした読図プロセスの分析

野田 香蓮

近年、文書館における利用者の増加を目指し、文書館の在り方や活動における議論がなされている。利用者の増加のためには利用者に対する文書館資料の理解補助が不可欠であるが、これに関する対策は十分になされていない。特に文書館資料の主たる古文書、その中でも絵図は文字による表記が少なく表現が独特なため、絵図の読み方についての知識をもたない非専門家がこの資料から情報を得るのは困難である。このことから、絵図について、その内容や読み方に関する理解補助を行うことが必要である。そこで、本研究では絵図の読図手法を分析し、それをもとに読図の補助を行うツール（以下読図補助ツールとする）を作成することで、読図の理解補助を促進することを目的とする。

今回は、江戸時代の埼玉県飯能市矢嵐を描いた『高麗郡矢嵐村絵図』を対象とした。読図補助ツールの作成にあたり、『高麗郡矢嵐村絵図』における読図プロセスを分析した。この分析では近世史分野・日本考古学分野・日本文学分野の専門家3名に読図を行ってもらい、3人の読図プロセスをひとつに統合した。その結果、読図プロセスの大まかな流れとして、形状の確認、描かれている地域の特定、方角の特定、絵図の要素への注目、絵図と地図・航空写真との比較、という順に読図が行われることがわかった。その後、読図プロセスを元に読図補助ツールを作成した。読図補助ツールは全部で3部構成とした。第1部は分析によって得られた読図プロセス、第2部は第1部の読図を補完するための絵図と地図の重ね合わせ、第3部は絵図と地図・航空写真等との比較である。さらに、読図補助ツールの各場面で理解を補助するため、絵図の回転機能やレイヤー表示機能を導入した。

読図補助ツールの有効性を評価するため、10人の大学生に読図補助ツールを実際に利用してもらった。まず読図補助ツールに慣れてもらうため『高麗郡矢嵐村絵図』を読みといてもらった後、『高麗郡矢嵐村絵図』と同様の地域を描いた『矢嵐村絵図』について理解度を測る実験を行った。その結果、読図についての理解はおよそ半数に効果が見られ、絵図の内容についての理解は簡単な内容であれば8割以上が理解を示した。しかし読みときにやや複雑な思考を要求する絵図の内容についてはあまり理解が得られない結果となった。

今後の課題として、読図補助ツールの利用者の絵図に対する興味や注目した内容に沿って読図プロセスを検討すること、またそれを応用した読図補助ツールの開発が挙げられる。

(指導教員 宇陀則彦)